

Title	各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)
Sub Title	A study on the cognitive style of various sports players (1)
Author	須田, 芳正(Suda, Yoshimasa) 田中, 博史(Tanaka, Hiroshi) 川合, 武司(Kawai, Takeshi) 高橋, 宏文(Takahashi, Hirohumi) 綿田, 博人(Watada, Hirohito)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2000
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.39, No.1 (2000. 1) ,p.7- 16
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this study was to compare and construct the cognitive style of various sports players, so that we could accumulate the references and ideas to this study. In this study, 37 volleyball players, 43 baseball players, 42 soccer players, 23 basketball players, 45 kendo players, 39 track and field players from university and total of 229 players had been contrasted. We have measured the cognitive style by applying EFT cognitive style test and compared each group's result. From the test's result, we have come up with these conclusions. The scores of volleyball players were meaningfully higher than that of another players. From this result, It has been clear that players of volleyball players tend to be more field-dependent that players of all.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00390001-0007">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00390001-0007</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討 (1)

須田 芳正\*      田中 博史\*\*      川合 武司\*\*  
高橋 宏文\*\*\*      綿田 博人\*

## A study on the cognitive style of various sports players (1)

Yoshimasa Suda<sup>1</sup>      Hiroshi Tanaka<sup>2</sup>      Takeshi Kawai<sup>2</sup>  
Hirohumi Takahashi<sup>3</sup>      Hirohito Watada<sup>1</sup>

### Summary

The purpose of this study was to compare and construct the cognitive style of various sports players, so that we could accumulate the references and ideas to this study.

In this study, 37 volleyball players, 43 baseball players, 42 soccer players, 23 basketball players, 45 kendo players, 39 track and field players from university and total of 229 players had been contrasted. We have measured the cognitive style by applying EFT cognitive style test and compared each group's result.

From the test's result, we have come up with these conclusions.

The scores of volleyball players were meaningfully higher than that of another players.

From this result, It has been clear that players of volleyball players tend to be more field-dependent than players of all.

**Key words : sports player, cognitive style, field-dependent, embedded figure test**

### 緒 言

現在行われているスポーツはその種目ごとにルールがまったく異なるため、プレースタイルがまったく違った様相でゲームが行われる。したがって、それぞれのスポーツ種目には身体的な面、戦術的な面、心理的な面で特有のスタイルが存在する。

多くのスポーツ種目では絶えず多様に変化するゲーム状況の中で、適切なプレーを選択し遂行しなければ高いパフォーマンスは得られないと考えられる。特にボールゲームでは外界の状況を的確に認知・判断し、その場で可能な運動反応の方策の中から最適な方法を選んで行動することが要求されると考えられる。

外界からの刺激の受容・認知には、各人に固有の仕方があると考えられている。つまり、知覚・記憶・思考を必要とする場面において、情報をどのように受容し、処理するかといった、情報処理様式にみられる個人差であり、これが認知スタイルと呼ばれている<sup>9)</sup>。

Shugart, J.ら(1972)<sup>10)</sup>は、女子中学生を対象に、知覚指向スタイル(場独立-場依存)とバランス課題との関係をみた。その結果、ロッドアンドフレームテスト Rod and Frame Test (以下 RFT と略記する)に基づいた場独立群がよりバラ

\* 慶應義塾大学体育学研究所

\*\* 順天堂大学

\*\*\* 東京学芸大学

<sup>1</sup> Keio University, Institute of Physical Education

<sup>2</sup> Juntendo University

<sup>3</sup> Tokyo Gakugei University

## 各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)

ンス能力が優れているという結果を得ている。このことから、認知スタイルと運動パフォーマンスとの間に関係があることを報告している。また、松田ら(1977)<sup>9)</sup>は、筑波大学男子学生を対象に認知スタイルに関する研究を行い、それぞれの種目には特有の認知スタイルがあるという研究結果を得ており、その中で、バスケットボールやサッカーなどのチームスポーツ選手は、個人スポーツ選手と比べ、場依存的な認知スタイルを示す傾向にあることを報告している。

このようなことから、認知スタイルは、スポーツ分野において競技能力に大きく関係していると思われる。また、スポーツ種目において異なった認知スタイルがあると報告されていることから、種目において非常に重要な心理的適性があり、それぞれのスポーツ種目において要求される認知スタイルを解明する必要があると考えられる。

### スポーツと認知スタイルについて

#### (1) スポーツと認知スタイルの関係

体育・スポーツ活動、特に集団スポーツにおいて効果的に行動するためには、よくその場面を見まわして状況を正確に認知・判断してから行動しなければならない。つまり、運動の遂行には個人の認知スタイルが大きく関係していると考えられる<sup>9) 13)</sup>。

松田ら(1977)<sup>9)</sup>は、一般学生ならびに運動部所属学生などの運動部経験年数、スポーツ種目と6種類の認知スタイルとの関連について検討を行なった。その結果、埋没図形テスト Embedded Figure Test (以下 EFT と略記する) と図形の好みテストの2つの項目と運動経験年数との間に有意差が認められた。また、バスケットボール、サッカーなどが知覚運動的で、弓道、柔道が概念的、そして陸上、柔道が分析的傾向にあると報告している。これらの結果は、それぞれの種目には特有の認知スタイルがあるのではないかということを示唆している。また、藤田(1974)<sup>4)</sup>は、大学器械体操部所属の一流選手、及び非鍛錬者のいずれも男子を対象に、身体斜傾装置と照線を用い、空間の垂直方向の認知を調べる実験を行ったところ、視覚による垂直認知については鍛錬の方が優れていることを報告している。その他にも、概念テンポ(熟慮—衝動)と運動抑制能力との関係をみた Harrison, A. and Nadlman, L. (1972)<sup>6)</sup>、概念テンポと運動反応抑制・運動反応加速・認知反応抑制との関係をみた Costantini, F. 他(1973)<sup>3)</sup>、知覚指向スタイル(場独立—場依存)とバランス課題との関係をみた Shugart, J. (1972)<sup>12)</sup>など多くの研究者が認知スタイルと運動パフォーマンスの間に関係のあることを報告している。

以上のことから、スポーツと認知スタイルは大きく関係していると考えられる。特にスポーツ選手を対象とした研究では、場依存性—場独立性の研究<sup>1) 2) 4) 7) 9)</sup>が多く用いられている。

#### (2) 垂直知覚における場依存性—場独立性

場依存性—場独立性の研究は、初期の研究で、視覚的場の主要方向は垂直知覚において決定的な役割を演じることが確認された<sup>16) 17) 19)</sup>。

垂直知覚には垂直を知覚するために二つの要因があるといわれている。第一の要因は、人を取り巻く周囲の場であり、視覚を通じて取り入れられる。第二の要因は、重力方向であり、触覚や運動感覚を通じて知覚される。この二つの要因を実験的に分離しようとして検査に使用した測定装置は、身体調節検査 Body Adjustment Test (以下 BAT と略記する) と RFT, 回転室検査 Rotating-Room Test (以下 RRT と略記する) であった。被験者がこれら三つの実験事態を経験した場合、外的な場に依存するか、身体に依存するか程度には個人に一貫した傾向が見られた。これらの結果により、垂直を決定するに当たり外的な場を手がかりとするか、あるいは身体を手がかりとするかといった対照的な方法が存在することから、Witkin, H.A. ら(1985)<sup>20)</sup>は、前者の認知スタイルを「場依存的」、後者を「場独立的」と定義した。

#### (3) 埋没図形テストにおける場依存性—場独立性

次に中心となった研究では、前述した三つの定位課題は場に依存して行なわれるか、あるいは身体に依存して行われ

るかをみていると同時に、組織された場(部屋あるいは枠組み)から一つの項目(身体あるいは棒)を分離する機能にも関連しているという可能性を検討した。

この問題は、場に依存するかあるいは身体に依存するかといった定位課題や垂直知覚とは関係のない知覚課題を通じて検討された。この課題の例として、EFTがあげられる(Witkin, H.A. (1950a)<sup>18)</sup>。EFTは被験者に単純図形を示し、それらを複雑な図形の中から探し出すように求めるものである。その結果、複雑な図形から単純図形を探し出すことが困難な被験者は、定位課題において、部屋や枠の影響を受けるために身体や棒を分離できない人であり、場依存的であるということが明らかになった。逆に、単純図形を見つける場合に組織化された複雑な図形の影響を簡単に克服することができる被験者は、定位課題において、部屋や枠に影響されずに身体や棒の垂直を判断するので場独立的であるということが明らかになった。

#### (4) スポーツ選手における場依存性—場独立性

Kane, J.E. (1983)<sup>7)</sup>は、サッカー、バレーボールのようなOpen Skill系のチームスポーツ選手は、ゲーム状況においてほかのプレーヤーとの関連で場面を認知・判断し、適切なプレーを選択するという点を考慮すると、他者に依存して自分を定位づける傾向がある場依存型の選手が有利である。一方、ダイビングや体操競技のようなClosed Skill系の個人スポーツ選手は、空間で自分自身を定位づける能力に優れていなければならないことから、場独立型の選手の方が有利なのではないかと述べている。この仮説を支持するような結果を得た研究を概観してみる。

Raviv, S. と Navel, N. (1988)<sup>13)</sup>は、バスケットボール選手における場依存性—独立性と集中力の関連性を検討した。この研究の中でEFTを実施した結果、ナショナルレベルのバスケットボール選手はアマチュアレベルの選手より、また、アマチュアレベルの選手は非競技者に比べて、より場依存的であるという結果を得ている。また、松田ら(1977)<sup>9)</sup>も同様にEFTを用いて、バスケットボールナショナルチームの候補選手の方が、大学男子選手より場依存的であったという結果を導き出している。さらに、Bard (1972)<sup>12)</sup>は、ソフトボール、バレーボール、サッカー、テニス、水泳、ダンス、器械体操の選手について検討した。その結果、バレーボールの選手が場依存型、ダンスを行なっている者が場独立型であることから、場依存型の者がチームのスポーツに、場独立型の者が個人的スポーツに向いていると報告している。Williams, J.M. (1975)<sup>10)</sup>は、フェンシングの選手を対象にHidden Figure Test(以下HFTと略記する)及びGottschaldt Figures Test(以下GFTと略記する)を実施した結果、熟練した選手ほど場独立型であると報告している。

前述したように、藤田(1974)<sup>8)</sup>は、大学器械体操部所属の一流選手、及び非鍛練者を対象に空間の垂直方向の認知を調べる実験を行なった。その結果、視覚による垂直認知については一流選手が優れており、場独立的であることを示していると述べている。

Cano, J.E. と Marquez, S. (1995)<sup>2)</sup>は、個人・集団スポーツの競技者と非競技者を対象に、場依存性—場独立性についての検討を行なった。EFTを用いて、バスケットボール、バレーボール、サッカーのチームスポーツの男子選手は非競技者群より場依存的であり、チームスポーツの女子選手は個人スポーツの男子選手・女子選手、及び非競技者群よりも場依存的であったと報告している。

しかし、このような研究結果とは反対に、Kane, J.E. (1983)<sup>7)</sup>を支持しない研究結果もいくつか報告されている。

工藤(1977)<sup>6)</sup>は、大学の体育実技コースに参加した男子大学生を対象に、サッカー、バスケットボール、バドミントンの4種目すべてに参加した者のゲームセンスとRFTの得点の関係について検討し、場独立型の方がチームスポーツに有利であると報告しているが、この結果は、対象とした集団がスポーツを専門的に行っている集団ではないためこのような結果になったものであると考えられる。また、浦田(1982)<sup>14)</sup>は、ラグビーにおける4対4の攻防を課題とし、状況判断能力とRFT及びEFT得点との関連を大学生のラグビー選手を対象に検討した。その結果、EFT得点に基づき抽出された場独立群は、場依存群に比べ、状況判断能力が有意に高い得点を示すという結果を報告している。しかし、

## 各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)

ラグビーは本来15対15で行うスポーツであり、4対4の実験場面では状況の設定が実際のゲーム場面と異なるためこのような結果になったと考えられる。

以上のように、統一された見解は得られていないが、研究方法を詳細に検討すると、チームスポーツ選手は場依存型、個人スポーツ選手は場独立型の傾向にあると思われる。

サッカーは味方とのコミュニケーションを十分にとり、常に周囲の状況をよく認知、判断した上でチームプレーを遂行する必要がある<sup>10)</sup>。山本(1997)<sup>21)</sup>は、サッカーのゲームにおいて、より優れたプレーをするためには、速く、正確な「判断」が必要である。その「判断」のためには、次に展開されるプレーを「予測」しなければならない。そして、正確に「予測」するためには、周囲の状況をしっかり把握していなければならないと述べている。また、バレーボールにおいても、ゲームの様相はサッカーと大きく異なるものの、相手の攻撃を味方にパスする際に、味方の動きや位置を把握できなければ有効な攻撃につながらない。これら2つのスポーツにおいては、他者との関連で自分を定位づける傾向がある場依存型の選手が有利であると考えられる。

現在認知スタイルに関する研究の中には、個人スポーツと、集団スポーツの比較・検討やネット型競技と対人型競技などスポーツを大きな分類で分けて報告したものがほとんどである。各種スポーツ選手の認知スタイルの報告もあるがどれも古く、現在のスポーツ選手の認知スタイルの検討が必要であると考えられる。

そこで本研究は、現在行われているスポーツ種目の中から今回調査が可能であった全6種目の選手の認知スタイルを明らかにするとともに、認知スタイルと関連すると考えられる closed skill-open skill という特性に着目し比較検討することによって、今後の研究及び指導の基礎的資料を得ることを目的とした。

## 方 法

### (1) 被験者

本研究における被験者は、K大学の男子サッカー部の選手18名、野球部の選手43名、男子剣道部の選手45名、男子陸上部の選手39名、男子バスケットボール部の選手23名、J大学男子バレーボール部の選手37名、男子サッカー部の選手24名であった。計6種目、総人数は229名であった。

また、これら被験者のプロフィールを表1に示した。

表1 被験者プロフィール

	年齢(歳)	学年(年)	競技年数(年)
バレー	21.06±1.86	2.54±0.98	8.24±1.65
野 球	20.91±1.52	2.48±1.84	11.47±3.28
サ ッ カ ー	20.18±1.16	2.03±1.54	11.97±2.12
バスケット	20.13±1.18	2.39±1.66	9.22±1.54
剣 道	21.11±1.96	2.25±1.47	11.11±3.43
陸 上	20.85±2.02	2.23±1.68	6.87±2.25

### (2) 測定期間及び場所

測定は、平成9年6月下旬から平成10年9月にわたって実施された。測定が行われた場所については各被験者の所在地の会議室及び教室にて行われた。測定中の被験者の配列等は各会場とも同じになるように設定した。

## 各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討 (1)

### (3) 認知スタイル測定に使用するテスト

松田ら (1977)<sup>9)</sup>が従来の諸研究で用いた認知スタイル・テスト (Cognitive Style Test, 以下 CST と略す) は 6 種のペーパーテストをまとめて構成したテスト・バッテリーであった。本研究においては松田ら (1977)<sup>9)</sup>の CST を参考に 6 種類のテストの中から場依存的——場独立的テストである埋没図形テスト EFT に競技年数やポジションを問うスポーツ選手用のフェイスシートをつけ集団用として新しく作成し直して使用した。

EFT は複雑な図形の中から単純な図形をみつけだすテストである。全部で 24 問あり制限時間 3 分間の正答数を EFT 得点とする。EFT 得点が高いものが場独立型で低いものが場依存型であると仮定されている。

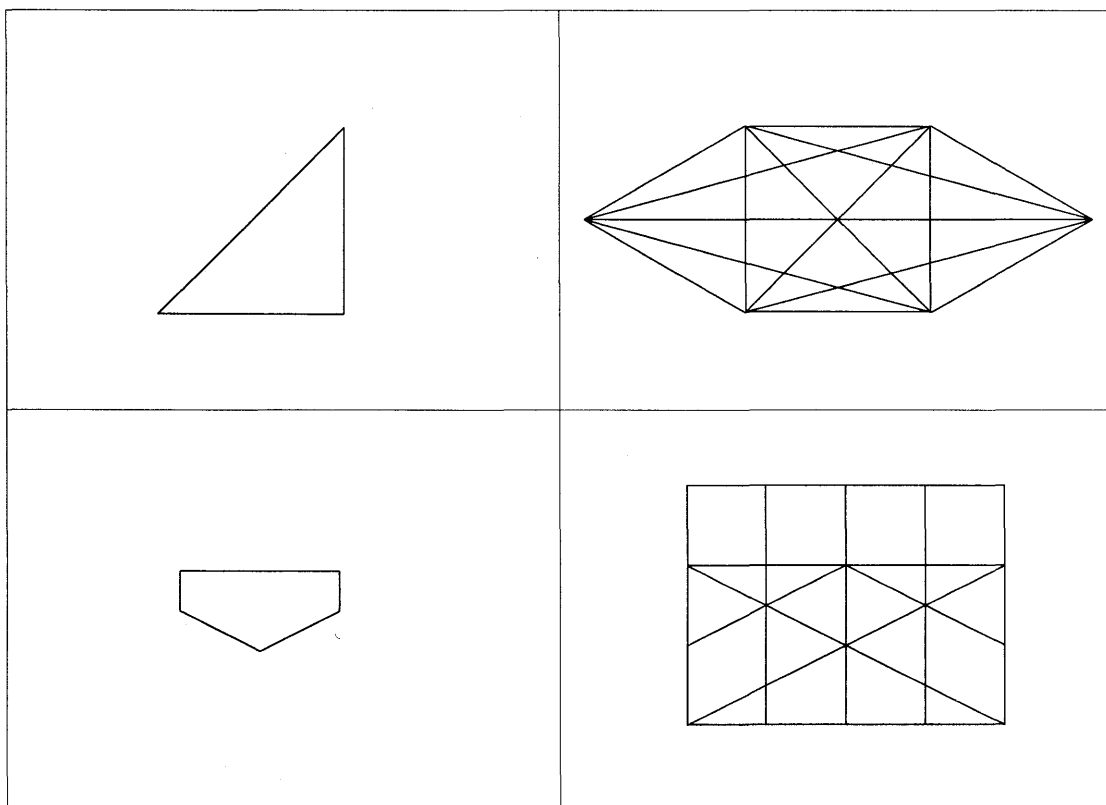
作成したテストを被験者全員に配布した後フェイスシートに記入させ以下の 6 点について注意を繰り返した。

1. 始めと言うまでやってはいけません。止めと言ったら直ちに鉛筆を置いて止めてください。
2. 開いた時はきちんと折るようにしてください。
3. 問題は順番にやってください。どうしてもわからない問題以外はとばしてはいけません。
4. 間違えたらその線は全部消しゴムで消してください。
5. それぞれの問題では 1 つの図形だけをなぞってください。それ以上見つかるかもしれませんがそのうちの 1 つの図形だけをなぞってください。
6. 複雑の図形の中に隠されている簡単な図形は右側にあるものと同じ大きさ、同じ形、同じ方向を向いています。

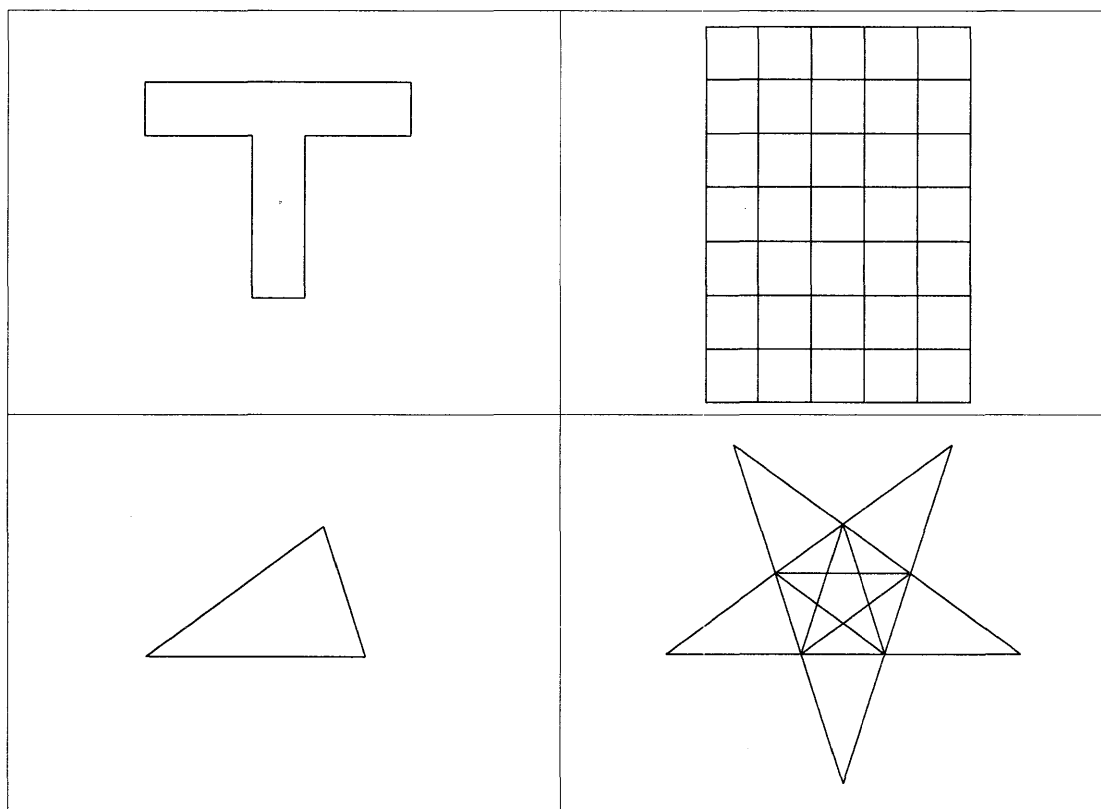
EFT の所用時間はフェイスシートの記入も含めて約 10 分程度であった。

なお、EFT の一例を資料 1 に示した。

#### 資料 1 EFT の一例



各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)



(4) 結果の分析

テストを得点化し、それぞれのスポーツ種目ごとに平均値および標準偏差を算出した。さらに、陸上をA群（closed系）、剣道をB群（中間系）、バレーボール、サッカー、野球、バスケットボールをC群（open系）と分類し分析を行った。また、比較には平均値の多重比較を用いた。

結 果

それぞれの種目におけるテストの得点の平均値及び標準偏差を表2に示した。また、図1は表2をグラフ化したものである。

各種目ごとに得点の平均値をみるとバレーボール $13.9 \pm 2.08$ 、サッカー $16.8 \pm 2.38$ 、野球 $16.3 \pm 3.35$ 、剣道 $18.6 \pm 2.93$ 、陸上 $19.1 \pm 3.06$ 、バスケットボール $16.9 \pm 2.69$ であった（表2）。それぞれの種目間の平均値の差の検定を行ったところ、バレーボールとすべての種目について1%水準で有意な差がみられた。また、サッカーと陸上、野球と剣道、野球と陸上についても1%水準で有意な差がみられ、サッカーと剣道、陸上とバスケットボールについて5%水準で有意な差がみられた。

表2 各種目の認知スタイルテストの得点

	N	M	SD
バレー	37	13.9	2.08
野 球	43	16.3	3.35
サ ッ カ ー	42	16.8	2.38
バスケット	23	16.9	2.69
剣 道	45	18.6	2.93
陸 上	39	19.1	3.06

各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討 (1)

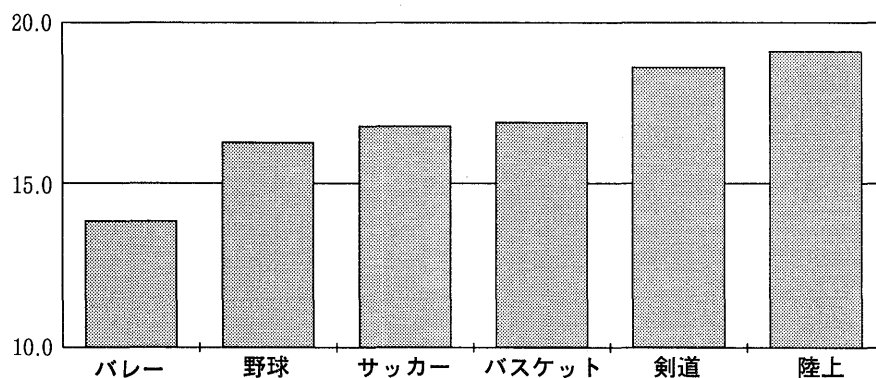


図1 各種目の認知スタイルテストの得点

また、A群、B群、C群の平均値と標準偏差を表3に示した。A群 $19.1 \pm 3.06$ 、B群 $18.6 \pm 2.93$ 、C群 $15.9 \pm 2.93$ とであった。また、図2は表3をグラフ化したものである。さらに、それぞれの群の平均値の差の検定をしたところA群とC群、B群とC群について1%水準で有意な差がみられた。

表3 各群の認知スタイルテストの得点

		N	M	SD
A	群	39	19.1	3.06
B	群	45	18.6	2.93
C	群	145	15.9	2.93

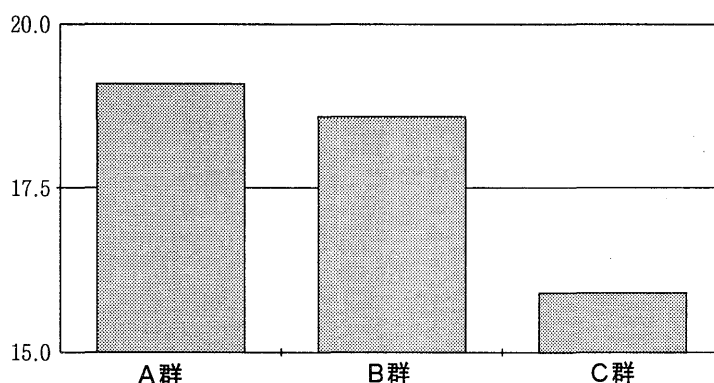


図2 各群の認知スタイル得点の比較

考 察

本研究の結果より、バレーボール、野球、サッカー、バスケットボール、剣道、陸上の順で得点が高くなっている。

本研究で用いたEFTは、複雑な図形の中から単純な図形を見つけ出しにくい、つまり、EFT得点が低いものを「場依存型」、複雑な図形の中から単純な図形を見つけることが容易である、つまり、EFT得点が高いものを「場独立型」として定義されている。これらをスポーツ選手用に解釈すると、次のように考えられる。

EFTにおいて場依存型は、周りの図形の影響を受け、単純図形を見つけ出すことが困難であるのではないかと考えられる。周りの図形の影響を受けやすいことは逆に捉えると周りの状況が良く見えているということであり、これをスポーツ場面に置き換えると、周りの状況が良く見えているということにつながると考えられ、スポーツ選手において場依存型



## 各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)

は周りの状況を認知・判断する能力に優れていると解釈でき、プレー中に視野を広く保っている選手であると考えられることができる。一方、場独立型は、周りの図形の影響を受けることなく単純図形を見つけ出すことができる。周りの図形の影響を受け難いことは、周りが良く見えていないと考えることができ、スポーツ場面に置き換えると、周りの状況が把握できていないことにつながり、スポーツ選手において場独立型は周りの状況を認知・判断する能力が場依存型に比べ低いと解釈でき、視野を広く保つことができない選手であると考えられている。

この解釈のもとに本研究の結果と合わせると、バレーボール選手がもっとも場依存的傾向が強く、陸上選手がもっとも場独立的傾向が強いことがわかる。さらにバレーボールとすべての種目について1%水準で有意な差がみられたことから、バレーボールの選手は他の種目の選手よりも場依存的傾向が強いということがわかる。

バレーボール競技は、コートの中の6人が1回のラリーで許される3回のボレーを使って、パス・トス・スパイクまたはレシーブ・トス・スパイクの3つの技術を使ったリズムで相手のコートにボールをゲットすることを競うスポーツである。バレーボール競技の3つのリズムを成功させるためには、味方へのパスまたはレシーブにおいてボールを追いかけながらパスをする味方の位置を確認する、味方のスパイカーや相手のブロックの居場所を確認してからトスをする、相手のブロックとレシーブの位置を確認してからスパイクするといったことが重要な要因の1つである。したがって、視野を広く保ち、相手や味方の配置など周りの状況を素早く判断して、その状況に応じた適切な方法を判断し、プレーを遂行することはバレーボール競技の攻防において有利な展開に運ぶための必要不可欠なことであると考えられるため、場依存的傾向がもっとも強かったのではないかと思われる。

また、結果よりサッカーと陸上、野球と剣道、野球と陸上についても1%水準で有意な差がみられ、サッカーと剣道、陸上とバスケットボールについて5%水準で有意な差がみられた。これらの結果は集団スポーツであるサッカー、野球、バスケットと個人スポーツである剣道と陸上について差があるものと考えられ、集団スポーツのほうが個人スポーツに比べより場依存的傾向が強いということがわかる。サッカーやバスケットボール、野球といった集団スポーツはバレーボール同様、視野を広く保ち、相手や味方の配置など周りの状況を素早く判断して、その状況に応じた適切な方法を判断し、プレーを遂行することがゲーム中の攻防において有利な展開に運ぶための必要不可欠なことであるため、集団スポーツ選手のほうが場依存的傾向が強いと考えられる。

また、A、B、C、3群での比較の結果より、A群とC群、B群とC群について1%水準で有意な差がみられた。これらより、C群がもっとも場依存的傾向が強く、A群がもっとも場独立的傾向が強いことがわかる。

先行研究において、Kane, J.E. (1983)<sup>7)</sup>は、サッカー、バスケットボールのような Open Skill 系のチームスポーツ選手はゲーム状況において他のプレーヤーとの関連で場面を認知・判断し適切なプレーを選択するという点を考慮すると他者に依存して自分を定位づける傾向がある場依存型の選手が有利であると報告している。また、Bard (1972)<sup>11)</sup>は、ソフトボール、バレーボール、サッカー、テニス、水泳、ダンス、器械体操の選手の認知スタイルについて検討した結果、バレーボールの選手が場依存型、ダンスを行なっている者が場独立型であることから、場依存型の者がチームのスポーツに、場独立型の者が個人的スポーツに向いていると報告している。さらに、Williams, J.M. (1975)<sup>15)</sup>は、フェンシングの選手を対象に Hidden Figure Test (以下 HFT と略記する) 及び Gottschaldt Figures Test (以下 GFT と略記する) を実施した結果、熟練した選手ほど場独立型であると報告している。

以上のことから考えると、C群のスポーツ種目はゲーム状況において他のプレーヤーとの関連で視野を広く保ちながら場面を認知・判断し適切なプレーを選択するという点を考慮すると他者に依存して自分を定位づける傾向がある場依存型の選手が有利であると考えられる。

本研究においても先行研究でも述べられている集団スポーツの選手は場依存的傾向が強く、個人スポーツの選手は場独立的傾向が強いということが明らかになった。それぞれのスポーツ種目においてもバレーボール選手がもっとも場依存的傾向が強く、陸上選手がもっとも場独立的傾向が強いことが明らかとなった。

## ま と め

本研究は、バレーボール、サッカー、野球、バスケットボール、剣道、陸上の選手の認知スタイルを明らかにすることを目的として行った。被験者は大学バレーボール選手37名、サッカー選手42名、野球43名、バスケットボール23名、剣道45名、陸上39名、計229名であった。

認知スタイルの測定には、従来より用いられている場依存型——場独立型・認知スタイルテストである EFT を用いて行った。

結果は、バレーボール選手がもっとも場依存的傾向が強く、陸上選手がもっとも場独立的傾向が強かった。

この結果より、個人スポーツの選手より、集団スポーツの選手の方が場依存的傾向が強いということが明らかになったが、今後の課題として、個人の持つ特性に着目し認知スタイルについての検討が必要であると考えられる。

## 参考文献

- 1) Bard,C. : The relation between perceptual style and physical activities. International Journal of Sport Psychology, 3,107- 113, (1972)
- 2) Cano,J.E.& Marquez,S. : Field dependence-independence of male and female spanish athletes. Percept. Mot. Skills, 80(3), 1155-1161, (1995)
- 3) Costantini,F.,et al. : Perceptual tempo, inhibition of Movement and acceleration of movement in 4-,7-,9-yr-old children. Perceptual and Motor Skills, 37,779~784, (1973)
- 4) 藤田厚 : 空間の認知と運動の制御, 初版. 13-83, 不昧堂出版 : 東京 (1974)
- 5) ハンス・オフト : ハンス・オフトのサッカー学, 初版,小学館 : 東京 (1994)
- 6) Harrison,A., and Nadleman,L. : Conceptual tempo and Inhibition of movement in black Preschool children. Child Development, 43, 657~668, (1972)
- 7) Kane,J.E. : Psychological aspect of physical education and sport, (太田鉄男監訳), 身体と運動の心理学. 初版, 大修館書店 : 東京 (1983)
- 8) 工藤孝幾 : チームスポーツにおけるゲームセンスと知覚様式との関係. スポーツ心理学研究, 4,(1), 20-26, (1977)
- 9) 松田岩男他 : スポーツ選手の認知スタイルに関する研究. スポーツ心理学研究, 4,(1), 27-32, (1977)
- 10) 中川昭 : ボールゲームにおけるゲーム状況の認知に関するフィールド実験——ラグビーの静的ゲーム状況について——. 体育学研究, 27,(1), 17-26, (1982)
- 11) Raviv,S.& Navel,N. : Field dependence/independence and concentration as psychological characteristics of basketball players. Percept.Mot.Skills, 66, 831-836, (1988)
- 12) Shugart,B.J.,Souder,M.A.,& Bunker,L.K. : Relationship between vertical space perception and a dynamic non-locomotor balance task. Percept.Mot.Skills, 34, 43-46, (1972)
- 13) Singer,R.N. : Motor learning and human performance (松田岩男監訳), スポーツトレーニングの心理学, 初版. 148-152,大修館書店 : 東京 (1986)
- 14) 浦田清 : ボールゲームにおける状況判断についての一考察——知覚様式との関連——. 筑波大学体育研究科修士論文, (1982)
- 15) Williams,J.M. : Perceptual style and fencing skill. Percept.Mot.Skills, 40, 282, (1975)
- 16) Witkin,H.A. : The effect of training and of structural aids on performance in three tests of space orientation. Civil Aeronautics Administration, Division of Research:Washington,D.C.(1948)

各種スポーツ選手の認知スタイルに関する検討(1)

- 17) Witkin,H.A. : Perception of body position and of the position of the visual field. Psychological Monograph, 302,(1949)
- 18) Witkin,H.A. : Individual differences in ease of perception of embedded figures. Journal of personality, 19, 1-15, (1950a)
- 19) Witkin,H.A. : Perception of the upright when the direction of the force acting on the body is changed. Journal of personality, 40,93-106,(1950b)
- 20) Witkin,H.A.,&Goodenough,D.R. : Cognitive styles (島津一夫監訳), 認知スタイル 本質と起源, 初版 7-76, プレーン出版 : (1985)
- 21) 山本昌邦 : サッカークリニック 5月号. ベースボールマガジン社, 36-39, (1997)